

川の子ども新聞

第15号

THE JOMO SHINBUN

上毛新聞

利根川の水の精「ボトム」



春、ほほえむ、水源地。

春は、わくわく、うきうき。水源地も楽しそう。
ほら、ノッポのダムも笑ってるみたいでしょ。



P2-3 草木ダム探検隊
とってもノッポの草木ダム
その中にヒミツがあるんだ
7人の記者が探検したよ!

P4-5 むかし、ぐんまに「港」があった!?
P6 [利根川博士に聞く]
利根川のいちばんはじめの一滴は?
P7 とびっくす・おたより
P8 ボトムの楽校

元気いっぱい探検隊! 草木ダムでどんなこと、発見したの?

川にまつわる話 14

板橋 春夫

◆「大間々」は何と読む

初めての人は「大間々」という地名がなかなか読めません。知らない人は「ダイカンカン」などと読んでしまします。正しくは「オオママ」で、この地名は「ママ」に由来します。ママというのは、渡良瀬川が長い年月をかけて形づくった河岸段丘の崖にある傾斜地のことをいう方言なのです。大間々の市街地は二丁目から七丁目まで国道122号に沿って発達していますが、その大間々面の一段上に桐原台地が並び、両者の間は傾斜地がつながれており、この傾斜地をママと呼ぶのです。漢字で書けば「間々」で、長く続いたママがあることから、この地形的特色をもつ町をいつのころからか人びとは大間々と呼ぶようになったのです。今も大間々には渡良瀬川に近い傾斜地の近くに「間々根」「間々下」「間坂」などの地名が残っています。



◆渡良瀬川の石尊様

大間々町高津戸は、秋には菊人形を飾る、ながめ公園が有名です。高津戸の集落では、毎年夏になると石尊灯籠を立てます。石尊様は神奈川県伊勢原市にある大山のことで、かつて村人がお参りに行って神様をお迎えしてきました。大山は別名雨降山といい、祈ると雨がふるといいます。今も順番で灯籠に火をともし風習が残っています。

第二次世界大戦前には、渡良瀬川に架かる高津戸橋の少し下流に富士山石があり、この大石の上に裸の若者が一升瓶を持って乗り、まわりから「ロッコンショウジョウ、ロッコンショウジョウ」と大声を上げながら水を掛けました。手に持った一升瓶がいっぱいになるまで水を掛けたといひます。昭和22年のカスリン台風で富士山石は埋まり、この行事はなくなりました。

◆16歳の女子は 赤城山に登れなかった

子どものいない赤堀道元夫婦が、赤城明神様をお願いしたところ、娘が生まれました。その娘が16歳になった年、赤城山に登りたいというので家来がついて赤城の小沼にやってきたところ、水が飲みたいと言った

板橋春夫(いたばし はるお)
1954年生まれ。群馬歴史民俗研究会代表。著書に『平成くらし歳時記(岩田書院、2004年)』、『暮らしの中の民俗学』第一巻(共著・吉川弘文館、2003年)などがある。